善導『往生礼讃』における六神通の特異性

小川法道

はじめに

六神通（六通）とは、仏や菩薩などが具える六種の自由自在な能力であり、神足通・天耳通・天眼通・他心通・宿命通・漏尽通の六つをいう。善導（六一三―六八一）は還相回向思想を述べる中で、『往生礼讃』では「六神通」と用い、『観経疏』では「大悲」と用いることはすでに筆者が論じたことではあるが、[1]「六神通」や「大悲」に関して、善導がどのように使用する傾向にあるのか、その詳しい内容については論じ切れていない。さらに善導が使用する「六神通」や「大悲」の思想を追った研究もない。すでに拙論で述べているが、いま一度、善導が使用する六通と六神通の用例を表にすれば以下の通りである。

	六神通	六通
往生礼讃	3	1
観経疏	0	2
観念法門	0	1
般舟讃	0	2
法事讃	0	2

表を見る通り、善導は五部九巻では「六通」の語を用いる傾向があるのに対し、なぜか『往生礼讃』だけは「六神通」の語を用いている。表題で「特異性」というのはそのような理由からである。善導が六神通の内容に関して異なった理解を示しているという意味ではない。本論では善導が使用する「六通」と「六神通」について考察を加え、その語を使用する際にはどのような特徴が見られるのか、また『往生礼讃』ではなぜ「六神通」の語を用いたのかを考えたい。

『観念法門』における六通

まず善導の五部九巻における「六通」の用例を見ていく。五部九巻の成立順序は研究者によって異なっているが、『観念法門』が最初ということでは共通している。[2] その『観念法門』では、「六通」に関して次の一例がある。

(1)問曰、夫人福力強勝、蒙佛加念故見佛。末法衆生罪愆深重。何由得與夫人同例。又此義者甚深廣大。一一具引

佛經、以爲明證。

答曰、佛是三達聖人、**六通無障**、觀機備教、不擇淺深。但使歸誠、何疑不見。即如觀經下説云、佛讃韋提、快問此事。阿難受持廣爲多衆、宣説佛語。如來今者教韋提希及未來世一切衆生、觀於西方極樂世界。以佛願力故、見彼國土、如執明鏡、自見面像。又以此經證。亦是彌陀佛三力外加故得見佛。故名見佛淨土三昧增上縁[3]

問う。韋提希は福徳の力が強く勝れているので、仏の加護を蒙るから、仏を見る〔ことができる〕。〔しかし〕末法の衆生は罪や過失が極めて重い。どのようにすれば〔韋提希〕夫人と同じように〔仏を見ることが〕できるのか。またこの道理は非常に重要なので、一々にみな仏の経典を引用して、それを証明せよ。

答える。仏は三明（＝三達）の聖者であるので、六通は障りがなく〔自在であり〕、機を観察して教えを準備することに〔機の〕浅い深いも関係しない。もし誠の心で帰依するならば、どうして〔仏を〕見ることができないと疑えようか。すなわち『観経』には「仏は韋提希を讃えた。『よくこのこと（見仏の因縁）を尋ねた。阿難よ。よく〔このことを〕受持し広く多くの衆生のために、仏の言葉を説こう。如来は今、韋提希と未来世のあらゆる衆生のために、西方極楽世界を観想する方法を教えよう。仏の願力によって、曇りのない鏡で自分の顔を見るように、極楽世界を見るようにさせよう。』」と説かれている。またこの『観経』によって証明する。またこれは阿弥陀仏が外から三力を加えるから、仏を見ることができる。だから見仏浄土三昧増上縁という。

ここでは仏に対して、三明と六通が使われている。その六通の力によって仏は衆生に応じた説法、すなわち対機説法をすると説いている。

『往生礼讃』における六通

善導の五部九巻の成立順序に関しては、研究者によって相違があるので、最初期と考えられている『観念法門』以外は、五十音順で検討することにする。次に『往生礼讃』における六通について見てみたい。

(2)勢至菩薩難思議　威光普照無邊際
有縁衆生蒙光觸　増長智慧超三界
法界傾搖如轉蓬　化佛雲集滿虚空
普勸有縁常憶念　永絶胞胎**證六通**(4)

勢至菩薩〔の威徳〕は、考えも及びがたい。威徳の光明はあまねく照らして際限がない。縁ある衆生が〔勢至菩薩の〕光明に触れられれば、〔その衆生の〕智慧が増大し三界を超える〔ことができる〕。〔その智慧によって〕全宇宙を揺れ動かすことは風の吹くままに任せて宛もなく飛んでゆく蓬のようである。化仏は雲の如く集まって空中を満たしている。あまねく縁ある衆生にいつも憶念することを勧める。永久に母の胎内に生まれることを断絶し六通を体得しなさい。

この箇所は『往生礼讃』における日中の部分で説かれていて、勢至菩薩を讃えることが文中の内容である。そして有縁の衆生には輪廻から離れて極楽浄土へ往生して、六通を体得しなさいと述べている。すなわちここでの「六

通」は極楽往生後の菩薩に対して説かれている。しかし六通を体得した後のことは説かれていないために、六通を体得することはあくまでも極楽往生後の目的となっていることぐらいしかわからない。

『観経疏』における六通

次に『観経疏』を見ていく。玄義分では以下のようにある。

(3)十方恆沙佛　**六通照知我**
今乘二尊教　廣開淨土門[5]

十方のガンジス河の沙の数ほど〔多く〕の仏よ。六通によって私を照らし知りたまえ。〔私は〕今、釈迦仏と阿弥陀仏の教えに乗じて、広く浄土の門を開こう。

善導は十方の諸仏に対して六通と言っている。この他にも『観経疏』定善義の第十三雑想観を解釈する中で「六通」に関して次のように述べている。

(4)六從阿彌陀下、至丈六八尺已來、正明能觀所觀佛像。雖身有大小、明皆是眞。即有其三。一明彌陀身通無礙、隨意徧周。言如意者、有二種。一者如衆生意。隨彼心念、皆應度之。二者如彌陀之意。五眼圓照、**六通自在**、觀機可度者、一念之中、無前無後、身心等赴、三輪開悟、各益不同也[6]。

六つに〔『観経』の〕「阿弥陀」から「丈六八尺」までは、まさしく観察対象の仏像を観想できることを明かしている。〔像の〕身体に大小〔の違い〕があるけれども、はっきりとみなこれは真実〔の仏〕であることを明かしている。すなわちそれに三つがある。一つには阿弥陀仏の神通には妨げがなく、心のままに行き渡っていることを明かしている。〔経文の〕「如意」というのは、二種類ある。一つには衆生の心のままにということである。〔阿弥陀仏は〕かの〔衆生の〕心の思いにしたがって、みな〔その心に〕応じてこれ（衆生）を済度する。二つには阿弥陀仏の心のままにということである。〔阿弥陀仏は肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼の〕五眼によって円満に照らし、六通が自在であり、済度すべき機を観察して、一瞬の間に、前もなく後もなく、身と心が等しく赴いて、〔身と口と心の〕三輪によって衆生をさとらせる。それぞれで利益することが異なっている。

この『観経疏』が注釈する『観経』の箇所は次のとおりである。

阿彌陀佛、神通如意、於十方國、變現自在。或現大身、滿虚空中。或現小身、丈六八尺。(7)

阿弥陀仏は神通が心のままであり、あらゆる世界において身を変えて現れることが自在であった。ある時は大きな身で現れて虚空中を満たしていた。ある時は小さな身で現れて、一丈六尺あるいは八尺となった。

すなわち善導は『観経』の「阿彌陀佛、神通如意、於十方國、變現自在」の「如意」の語を解釈して、衆生と仏との二つの解釈があることを示している。その仏の場合、阿弥陀仏に対して六通が自在であると説いている。

『般舟讃』における六通

次に『般舟讃』における六通の用例を見ていきたい。

(5)欲到彌陀安養國願往生　念佛戒行必須回無量樂
戒行專精諸佛讃願往生　臨終華座自來迎無量樂
一念之間入佛會願往生　三界六道永除名無量樂
三明六通皆自在願往生　畢命不退證無爲無量樂(8)

阿弥陀仏の安養国に往生したいと思えば、念仏や戒行を必ず回向すべきである。戒行をひたすら精進するならば諸仏はほめ讃え、臨終に華座をもって自ら来迎する。〔阿弥陀仏の極楽へ往生した者は〕一瞬の間に仏の会座に連なって、三界六道の名を永久に除く。三明や六通がみな思うままであり、遂には(9)不退転となり無為をさとる。

ここでは極楽に往生した者に対して、三明・六通が自在となることを説いている。

また『般舟讃』には次の一例がある。

(6)彌陀願力隨心大願往生　四種莊嚴普皆徧無量樂

三明六通常自在願往生　徧入衆生心想中無量樂
佛身相好依心起願往生　隨念即現眞金佛無量樂
眞金即是彌陀相願往生　圓光化佛現人前無量樂(10)

阿弥陀仏の願力は心に随って大きくなり、四種の荘厳はあまねくみな行き渡る。三明や六通はいつも思うままであり、あまねく衆生の心想の中に入る。仏の身体的特徴（相好）は心によって起こり、思い（念）にしたがって、すなわち真金〔色〕の〔身体をした〕仏が現れる。真金〔色〕とはすなわち阿弥陀仏の姿であり、円光から〔出る〕化仏は人々の前に現れる。

ここでは阿弥陀仏の三明・六通が自在であると説いている。この箇所を良忠の『般舟讃私記』では次のように解釈している。

彌陀願力等者、意云。悲心大故、願力亦大。願力大故、莊嚴普遍。
遍入衆生等者、經云、入一切衆生心想中。已上
眞金即是乃至現人前者、經云、見一寶像如閻浮檀金色坐彼華上。見像坐已、心眼得開了了分明。已上(11)

「弥陀願力」等とは、〔私の〕考えを言えば、大悲の心が大きいから、願力もまた大きくなる。願力が大きいから、〔極楽の〕荘厳はあまねく行き渡っている。

「遍入衆生」等とは、『〔観〕経』には、「〔諸仏は〕すべての衆生の心想の中に入る」と説いている。

「眞金即是」から「現人前」までは、『〔観〕経』には、「一つの宝でできた像が閻浮檀金色のごとくであり、

かの華の上に坐っているのを見なさい。像に坐っているのを見終わったならば、心の眼を開くことができてはっきりと見えるようになる」と説いている。

良忠の解釈によれば、善導の『般舟讃』の「徧（遍）入衆生」以降は、第八像想観を解釈しているとする。しかし「三明六通」に関しては、『観経』の像想観もしくはその前の第七の華座観には見られない。よって『般舟讃』では善導が阿弥陀仏に対して三明・六通が自在であると解釈して述べたといえる。先の『観経疏』の引用(4)と同じである。

『法事讃』における六通

最後に『法事讃』では次のように述べている。

(7)願往生願往生

彌陀侍者二菩薩　號曰無邊觀世音
一切時中助佛化　分身六道起慈心
念念隨機爲説法　惛惛難悟罪根深
百計千萬數出世　萬中無一出煩籠
念汝衆生長劫苦　諸佛對面不相逢

人天少善尚難辯　**何況無爲證六通**
雖得見聞希有法　麤心懈怠益無功
縱使連年放脚走　趣得貪瞋滿内胸
貪瞋即是身三業　何開淨土裏眞空
寄語同生善知識　念佛慈悲入聖叢
衆等傾心皆願往　手執香華常供養(12)

阿弥陀仏の侍者である二菩薩は、無辺（勢至）と観世音という。あらゆる時において仏の教化を助けて、身を六道に分けて慈心を起す。一瞬一瞬、機にしたがって法を説く。心が暗く愚かでさとり難いのは罪根が深いからである。百の方法によって千万回ほど世に出ても、一万人の中、一人も煩悩に縛られた〔輪廻という〕籠から出たことはない。あなたたち衆生の長い間の苦しみを思うと、諸仏と対面しても出会わなかったのと同じである。人天のわずかな善根すら具えることが難しい。ましてやさとりの境地（無為）や六通を体得することなどできようか。素晴らしい教えを見聞きすることができたとしても、粗い心は懈怠であるから利益は得られない。たとい年を積み、ほしいままに修行し（脚走）、行ったり来たりして貪瞋が内心を満たしている。貪瞋とはすなわち身の三業のことである。どうして浄土の中で真如が空であるすがた（真空）を開くことができようか。同じく往生を願う善知識に告げる。「仏の慈悲を念じて聖衆の中に入れ」と。大衆は心を傾けてみな往生を願え。手に香と華をもって常に供養せよ。

ここではある衆生が娑婆世界において、観音・勢至の教化を受けたにも関わらず、わずかな善根すら具えられな

いので、六通を具えることができない、という意味で「六通」が使われている。

また『法事讃』では次のような一例がある。

(八)般舟三昧樂願往生　坐已身同紫金色無量樂
從佛須臾至寶國願往生　直入彌陀大會中無量樂
般舟三昧樂願往生　見佛莊嚴無數億無量樂
三明六通皆具足願往生　憶我閻浮同行人無量樂
般舟三昧樂願往生　同行相親願莫退無量樂
七周行道散華竟願往生　供養冥空諸佛會無量樂
般舟三昧樂願往生　大會頂禮別彌陀無量樂(13)

般舟三昧の楽しみ。坐りおわって〔見ると私の〕身が〔仏と〕同じように紫金色となっている。仏にしたがってすぐに宝でできた国土に至り、ただちに阿弥陀仏の大会の中に入った。般舟三昧の楽しみ。〔私は〕仏の荘厳が無数億であるのを見て、三明と六通をみな具えて、わが閻浮提の同行人のことを思い出した。般舟三昧の楽しみ。同行とは互いに親しんで、退転することがないように願っていた。七周行道して華を散らしおわって、眼には見えない諸仏の大会を供養する。般舟三昧の楽しみ。大会に頂礼して阿弥陀仏と別れる。

ここでは極楽往生後の菩薩に対して、三明六通と使われていることがわかる。しかも閻浮提の同行人を思い出すことから、還相廻向の思想を想起するが、その具体的な菩薩行が説かれていないために、還相回向とは判断しがた

い。

小結

これまでの検討を通して、善導は仏、極楽往生後の菩薩、娑婆世界の衆生に対して、「六通」の語を使用していることがわかる。用例をまとめると以下のようになる。

・仏　『観念法門』一例（一般的な仏）、『観経疏』二例（十方諸仏・阿弥陀仏）、『般舟讃』一例（阿弥陀仏）
・極楽往生後の菩薩　『往生礼讃』一例、『般舟讃』一例、『法事讃』一例
・娑婆世界の衆生　『法事讃』一例

善導が「六通」の意味を規定して使用していたかは、用例が少ないので確定はできないが、『観経疏』はわずか二例だけで考えると仏に対して共通して用いているといえる。

『往生礼讃』における「六神通」の用例

先に善導の五部九巻における「六通」の語を見てきた。次になぜ『往生礼讃』だけに「六神通」の語が採用されたのかを考えてみたい。善導は『往生礼讃』前序の五念門、第五廻向門を解釈する中で、次のように述べている。

①又到彼國已、**得六神通**、回入生死、教化衆生。徹窮後際、心無厭足、乃至成佛。亦名回向門。[14]

また極楽世界に往生した後には、六神通を得、生死輪廻の世界に帰って来て、衆生を教化しよう。〔それを〕未来世まで極め尽くし、心に飽くことなくして、ついに仏となろう。〔これを〕また廻向門という。

ここで善導は還相廻向を述べる中で、「六神通」の語を用いている。すなわち極楽世界に往生した後、「六神通」を得てから、衆生の救済を行うとしている。

次に『往生礼讃』の発願文では「六神通」に関して以下のように述べている。

②到彼國已、**得六神通**、入十方界、救攝苦衆生。虚空法界盡、我願亦如是。[15]

極楽世界に往生した後には、六神通を得、十方世界に入って、苦しむ衆生を救済しよう。あらゆる世界が尽きることがないように、私の願もまたそのようにしたい。[16]

①と同じように極楽往生後に「六神通」を得てから衆生の救済を目的としている。

そして『往生礼讃』の中夜を説く中で、善導は五悔（懺悔・勧請・随喜・回向・発願）について述べている。その発願では次のように説く。

③至心發願

願捨胎藏形　往生安樂國

速見彌陀佛　無邊功德身
奉覲諸如來　賢聖亦復然
獲六神通力　救攝苦衆生
虛空法界盡　我願亦如是[17]

心から願を起こす。願わくは母胎（輪廻）から生まれた身を捨てて、安楽国に往生させてください。速やかに阿弥陀仏の限りない功德の身を見て、諸仏に対面し〔そして〕仕え、賢者と聖者にもまたそのようでありたい。〔そして〕六神通力を獲得し、苦しむ衆生を救済しよう。あらゆる世界が尽きることがないように、私の願もまたそのようにしたい。

ここでは阿弥陀仏・諸仏・賢聖と出会った後に「六神通力」を得るという。①②と同じように「六神通」を得ることでは共通しているが、③だけは「六神通力」となっている。ここは明らかに三十巻『仏名経』の影響を受けたものといえる。[18] 以上『往生礼讃』の引用①②③のように、善導が「六神通（力）」の語を用いている時には、還相廻向の思想を説くことで共通している。

そして善導が阿弥陀仏を「無辺功德身」と説くことに関しては、次の『宝性論』巻四の弥陀偈の影響を受けたものであろう。

依此諸功德　願於命終時
見無量壽佛　無邊功德身

我及餘信者　既見彼佛已
願得離垢眼　成無上菩提[19]

この諸功徳によって、願わくは命終わる時に、無量寿仏の限りない功徳の身と出会わさせてください。私と他の信者は現に彼の仏と出会えたので、願わくは煩悩を離れる眼を得て、この上ないさとりを成就させてください。

この引用より先に「此れより已下は、彼の説法の得る所の功徳、以て廻向を用ふるが故に三偈を説く」とあることから、功徳を廻向して私と他の人々に仏と出会えるように願っていることがわかる。それによって煩悩から離れる眼を得て成仏を目指すことを説いている。

善導は『往生礼讃』において、引用③の他にも、「発願」の内容を説く所で、『宝性論』弥陀偈を引用している。

説偈發願
禮懺諸功德　願臨命終時
見無量壽佛　無邊功德身
我及餘信者　既見彼佛已
願得離垢眼　往生安樂國
成無上菩提。[20]

わずかな文字の相違はあるが、『宝性論』を引用したことは間違いない。[21] この『宝性論』の「見無量壽佛　無邊功德身」を『往生礼讃』中夜（引用③）では「速見彌陀佛　無邊功德身」とし、さらに『仏名経』の内容を加えて、[22] 発願の偈頌を創作している。

すなわち『往生礼讃』は、多くの経論の文言を引用し、極楽往生に関する文言を付与して、善導独自の著作を作り上げようとしたことがわかる。それはやはり儀式儀礼のテキストを作るためであろう。[23] よって善導の五部九巻の「六通」と『往生礼讃』の「六神通」と表現が異なるのは、「六通」の方は善導が好んで使用する傾向にあるが、「六神通」の方は儀式儀礼のテキストを作ろうとする過程で、善導が経論の中から用語を選び、自身の著作にそのまま採用したためであると考えられる。

ところで『観経』の中品上生には「三明六通」と使われている。以下は『観経』の中品上生の内容を見てみたい。

當華敷時、聞衆音聲讚歎四諦。應時即得阿羅漢道。三明六通、具八解脱。[24]

〔極楽世界の〕蓮華が開く時に当たって、多くの音声によって四諦をほめ讃えることを聞いた。ちょうどその時に阿羅漢の境地に到達した。三明と六通と八解脱を具える。

これに関して善導は『観経疏』散善義において、次のように注釈している。

七從當華敷時、下至八解脱已來、正明第十一門中、華開已後、得益不同。即有其三。一明寶華尋發。此由戒行精強故也。二明法音同讚四諦之德。三明到彼聞説四諦、即獲羅漢之果。言羅漢者、此云無生、亦云無著。因亡

故無生。果喪故無著。言三明者、宿命明、天眼明、漏盡明也。言八解脱者、内有色外觀色一解脱、内無色外觀色二解脱。不淨相三解脱。四空及滅盡、總成八也[25]。

七つに「当華敷時」から「八解脱」までは、まさしく第十一門の中、蓮華が開いた後の利益に異なりがあることを明かしている。すなわちそれに三つある。一つには宝華がまもなく開くことを明かしている。これは戒行がひたすらすぐれていることによるからである。二つには法音が〔みな〕同じように四諦の徳を讃えていることを明かしている。三つにはかの四諦が説かれるのを聞くことによって、すなわち阿羅漢果を獲得することを明かしている。「羅漢」と言うのは、中国では無生といい、また無著という。原因が消滅するから無生という。結果を失うから無著という。「三明」と言うのは、宿命明・天眼明・漏尽明である。「八解脱[26]」と言うのは、内に色〔相〕有り、外に色を観ずる（内有色外観色）とは第一の解脱である。内に色〔相〕なく外に色を観ずる（内無色外観色）とは第二の解脱である。不浄相は第三の解脱である。四空（空無辺処・識無辺処・無所有処・非想非非想処）と滅尽定〔の解脱〕をまとめて八つとなる。

善導は『観経』で説かれる羅漢・三明・八解脱を説明しているにも関わらず、なぜか「六通」だけは説明を加えていない。ここで善導が影響を受けたとされる浄影寺慧遠（五二三―五九二）の『観経義疏』を見てみたい。慧遠は『観経』のこの箇所について以下のように注釈している。

第三益中、初華開聞法後得道果。得羅漢者、此名無生、亦名無著。無著因亡、無生果喪。言三明者、所謂宿命、天眼、漏盡是其三也。言六通者、所謂身通、天眼、天耳、他心、宿命及與漏盡。廣如別章。八解脱者、經中亦

名八背捨也。名字是何。内有色相外觀色一。自身名内、他身名外。於自身色、未滅未壞、名爲内有觀。内外色悉皆不淨、名外觀色。…（中略）…。内无色相外觀色二。於自己身、豫作死相虫食、火燒破壞之相、名爲内无觀察外色。悉皆不淨。此前二種、是不淨觀。淨相解脱以爲第三。於内外色、除去皮肉、唯觀白骨。前三色觀。空處、識處、无所有處、及非想解脱、復以爲四、通前爲七。聖人得彼四空處定、即説爲此四解脱也。滅盡解脱以爲第八。[27]

第三の〔往生以後の〕利益の中、初めに蓮華開いた後に教えを聞く。後に仏道修行の結果（阿羅漢果）を得る。「得羅漢[28]」とは、中国では無生といい、また無著という。無著とは原因を消滅すること、無生とは結果を失うことをいう。「三明」と言うのは、つまり宿命明・天眼明・漏尽明の三つのことである。「六通」と言うのは、つまり神足通・天耳通・天眼通・他心通・宿命通・漏尽通の六つのことである。詳しくは別の『〔大乗義〕章』のとおりである。「八解脱」とは、経の中ではまた「八背捨」という。〔八つの〕名称は何というのか。内有色相外観色は第一である。自分自身を内といい、他の身を外という。自身の色に対して、まだ消滅せず、まだ壊れないのを内有観という。内と外の色がみな不浄なのを外観色という。…（中略）…内無色相外観色は第二である。自己の身体に対して、あらかじめ死ぬ姿、虫に食われること、火で焼かれて破壊される姿を観察するのを、内無という。外の色を観察してみな不浄である〔と知る〕。この前の二種は、不浄観のことである。浄相解脱は第三である。内外の色に対して、皮や肉を取り除いて、白骨だけを観察する。前の三つは色観である。空無辺処・識無辺処・無所有処・非想非非想処の解脱でまた四つとなる。先と合わせて七つとなる。聖人はかの四空処定を得る。すなわちこれを四解脱と説いている。〔そして〕滅尽定の解脱をもって第八となる。

善導は慧遠の「無著因亡」を「因亡故無生」とし、また慧遠の「無生果喪」を「果喪故無著」として、無著と無生を入れ替えている。[29] 羅漢や三明や八解脱の説明を見れば、善導は慧遠の影響を十分に受けていることがわかる。

以上のことから考えるならば、善導は意図的に「六通」の語を説明しようとしなかったことが理解できる。それに関して二つの理由を想定することができる。一つは「六通」の語が説明を加えるまでもないほど、周知されていたものであるために、説明することをやめた。いま一つは「六通」の語に関して、善導の解釈に不備があったから、説明を加えなかった。

前者であるならば、三明に関しても説明を加えるほどではないと考えられる。次に後者は拙論で示したように『大智度論』の説示を通して「六通」が「仏」に対して使われることを善導が理解したからと考えられる。[30] そうなると、善導ははじめ『往生礼讃』に「六神通」の語を用いていたのに、『観経疏』では「大悲」の語へと変更したといえ、『往生礼讃』の不備を『観経疏』で補ったといえる。

また小結で示したように極楽往生後の菩薩に対して「六通」の語を使っているのは、『往生礼讃』、『般舟讃』、『法事讃』にそれぞれ一例ずつであるので、その三つの著作の後に『観経疏』が作られたと見ることもできるが、「六通」に関しては『観経疏』の用例や他の著作の用例も少ないために、推論にとどまらざるを得ない。ただ少なくとも善導が『観経疏』においては意図的に六通の語の説明することを避けたのは事実であろう。

おわりに

以上、善導における「六通」と「六神通」の用例を見てきた。善導は好んで「六通」の語を使う傾向にあり、

「六神通」の語は儀礼書を作る過程で、他の経論からの影響を受けたために、『往生礼讃』ではその語がそのまま採用されたといえる。特に「六通」の場合は、菩薩の到達目標や仏の特性であるのに対し、「六神通」の場合は、菩薩行としての還相廻向の思想を説くことだけに使われている。この儀礼書に注目するならば、善導の『往生礼讃』は他の経論の影響を受けながらも、善導独自の儀礼を整える必要があったと考えることができる。このことから考えると、『往生礼讃』は儀礼書の中でも比較的早期に作成されたといえるのではないか。

また善導が『観経疏』の中品上生を解説するにあたり、浄影寺慧遠の『観経義疏』の影響を受けて、羅漢・三明・八解脱については説明するが、六通のみは解説されることはなかった。このことは善導が意図的に「六通」の説明を避けたと理解できる。しかしそれによって五部九巻成立問題は解明することの一助とはなりえるが、解明できたとはいえないので、善導の五部九巻における思想の変遷を統合的に見ていく必要がある。

【参考文献】

小川［二〇二二］小川法道「善導における還相廻向の思想」『仏教学会紀要』第二七号、二〇二二年。
齊藤［一九九九］齊藤隆信「發願文小考―成立と展開―」『浄土宗学研究』第二五号、一九九九年。
齊藤［二〇一五］齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究　善導と法照の讃偈の律動を中心として』法蔵館、二〇一五年。
柴田［二〇〇〇］柴田泰山「善導『往生礼讃』所引の『宝性論』弥陀偈について」『佛教文化学会紀要』第九号、二〇〇〇年。後に『善導教学の研究　第二巻』山喜房仏書林、二〇一四年に収録される。
柴田［二〇二一］柴田泰山「『往生礼讃』所説の発願文について」『善導教学の研究　第三巻』山喜房仏書林、二〇二一年。

三枝樹［一九七三］　三枝樹隆善「発願文の読み方」『佛教論叢』第一七号、一九七三年。

【註】

（1）小川［二〇二二］。

（2）詳しくは小川［二〇二二］参照のこと。

（3）『観念法門』、『浄土宗全書』（以下、『浄全』）四・二三〇b。太字は筆者によるものである。以下も同じ。

（4）『往生礼讃』、『浄全』四・三七二b。

（5）『観経疏』玄義分、『浄全』二・一b。

（6）『観経疏』定善義、『浄全』二・五三a。

（7）『観経』、『浄全』一・四六。『大正新脩大蔵経』（以下、『大正』）一二・三四四c。

（8）『般舟讃』、『浄全』四・五三一a—b。

（9）原文は「畢命不退」であるが、良忠『般舟讃私記』の指摘により、「畢竟不退」で読む。『浄全』四・五五一b。

（10）『般舟讃』、『浄全』四・五四〇b。

（11）『般舟讃私記』、『浄全』四・五五九a。

（12）『法事讃』巻下、『浄全』四・二一b。

（13）『法事讃』巻下、『浄全』四・三〇a。

（14）『往生礼讃』、『浄全』四・三五五a—b。

（15）『往生礼讃』、『浄全』四・三六〇a。

(16) 小川［二〇二二］では、「救攝苦衆生、虚空法界盡、我願亦如是」を「〔たとえ〕世界の果てのどこであろうとも、苦しむ衆生を救済しよう。私の願もまたそのようにしたい」と訳していたが、良忠『往生礼讃私記』巻上の指摘によって訂正する。「虚空法界盡等者、意云、虚空法界若不盡者、即我願亦不盡也」（『浄全』四・三九四ａ）。このことに関しては、本庄良文先生・上野忠昭先生・曽和義宏先生に「虚空法界盡」の解釈（特に反語）や良忠の指摘を御教示いただいた。ここに感謝申し上げます。

また齊藤［一九九九］は、「虚空法界盡」に関して、「善導の発願文では己の誓願が虚空のように廣大で障害がなく、すべてに行き渡っているという空間的な無限を意味するものである」と指摘している。他にも三枝樹［一九七三］や柴田［二〇二一］は、「虚空法界盡」の解釈を挙げている。

(17) 『往生礼讃』、『浄全』四・三六五ａ―ｂ。傍線は筆者によるものである。以下も同じ。

(18) 齊藤［一九九九］、小川［二〇二二］。

(19) 『大正』三一・八四八ａ。並びに八二〇ｃ。

(20) 『往生礼讃』、『浄全』四・三五九ｂ。

(21) 『宝性論』に関しては柴田［二〇〇〇］を参照のこと。

(22) 『仏名経』の内容については、齊藤［一九九九］、小川［二〇二二］を参照のこと。

(23) 善導の五部九巻におけるそれぞれの儀礼の特徴に関しては、齊藤［二〇一五］を参照した。

(24) 『観経』、『浄全』一・四八。

(25) 『観経疏』散善義、『浄全』二・六五ｂ。傍線は筆者によるものである。以下も同じ。

(26) 「八解脱」については石田瑞麿『例文仏教語大辞典』（小学館、一九九七年初版、八七三頁）や多屋頼俊・横超慧

日・舟橋一哉『新版　仏教学辞典』（法藏館、一九九五年初版、三六四頁）などを参照した。また櫻部建・小谷信千代・本庄良文『倶舎論の原典研究　智品・定品』（大蔵出版、二〇〇四年、三二九―三三〇頁）には「解脱は八である。色を有する者がもろもろの色を観る、というのが第一の解脱である。内に色想なき者が外にもろもろの色を観る、というのが第二である。浄解脱を身をもって現証して、〔それを〕具有して在る、というのが第三。四無色〔定〕〔が〕すなわち第四・第五・第六・第七の四解脱である〕。想受滅が第八〔解脱〕である」という。他に『阿毘達磨倶舎論』巻二九（『大正』二九・一五一ｂ）、『大智度論』巻二一（『大正』二五・二一五ａ）、『大乗義章』巻一三（『大正』四四・七三四ａ）を参照。

(27)　『観経義疏』末、『浄全』五・一九七ａ―ｂ。『大正』三七・一八五ｂ。『浄全』の指示によって、「成」を「廣」に、「悲」を「非」に訂正する。浄影寺慧遠の『観経義疏』は便宜上、書き下しを付しておく。

第三の益の中、初めに華開いて法を聞く。後に道果を得。得羅漢とは、此には無生と名づく、亦、無著と名づく。無著は因亡ず、無生は果喪びる。三明と言うは、所謂る宿命、天眼、漏盡是れ其の三なり。六通と言うは、所謂る身通、天眼、天耳、他心、宿命および漏盡なり。廣く別章の如し。八解脱とは、經中に亦、八背捨と名づくるなり。名字是れ何んや。内有色相外觀色は一なり。自身を内と名づけ、他身を外と名づく。自身の色に於て、未だ滅せず未だ壊せざるを、名て内有観とす。内外色悉く皆不浄なるを、外観色と名く。…（中略）…内无色相外観色は二なり。自己の身に於て、予め死相虫食・火焼破壊の相を作す。名て内无とす。外色を観察して悉く皆不浄なり。此の前の二種、是れ不浄観なり。淨相解脱を以て第三と爲す。内外色に於て、皮肉を除去して、唯白骨を観ず。前の三は色観なり。空處、識處、无所有處、及び非想解脱、復以て四と爲す。通じて前の七と爲る。聖人、彼の四空處定を得。即ち説いて此を四解脱と爲すなり。滅盡解脱を以て第八と爲す。

(28) ちなみに『大乗義章』巻十七本では「阿羅漢者、亦外國語。外國語中、三名相通。一阿羅訶。此云應供。二阿盧漢。此云殺賊。三阿羅漢。此方正翻、名曰不生。隨義三翻。傍説爲無著。無著因亡」（『大正』四四・七九〇c）と説明している。

(29) 善導は慧遠の表現から変えようとしたぐらいしか、今の所、理由はわからない。

(30) 小川［二〇二二］。